

# 演習形式を導入した体育授業が「社会人基礎力」向上に及ぼす影響

The effect of physical education classes that introduce exercise formats on improving the fundamental competencies for working persons

埴 佐敏 Hanawa Satoshi

(家政学部こどもの生活学科)

## 抄 録

【目的】職場や社会の中で多様な人々とともに行動していくために必要な能力として「社会人基礎力」の重要性が指摘されている。本研究では、演習形式を導入した体育授業によって社会人基礎力向上にどのような効果があるのかを検討することを目的とした。【対象】健康栄養学科1年（授業Ⅰ）、こどもの生活学科2年（授業Ⅱ）及び同専攻3年（授業Ⅲ）とした。【結果】授業形態3×測定時期2による二元配置分散分析を行ったところ、3つの能力とも授業後に有意に向上していた（前に踏み出す力； $F=26.63, p<.001$ 、考え抜く力； $F=18.40, p<.001$ 、チームで働く力； $F=41.44, p<.001$ ）。また、12の能力要素について Wilcoxon の符号順位検定を行ったところ、「働きかけ力」「実行力」「柔軟性」はいずれの授業においても有意な向上を示したことから、演習形式を導入した体育授業は、社会人基礎力向上に効果を発揮する可能性が示唆された。

## キーワード

社会人基礎力    fundamental competencies for working persons    演習形式    exercise formats  
大学体育授業    university physical education class

## 目 次

- I. 緒言
  - I-1. 非認知能力としての社会人基礎力
  - I-2. 大学教育における社会人基礎力の育成
- II 研究対象、研究内容
  - II-1. 研究対象
  - II-2. 研究内容
  - II-3. 分析方法
- III 結果
- IV 考察
- V 結論

## 1. 緒言

### 1.1 非認知能力としての社会人基礎力

ノーベル経済学賞を受賞したベックマン (2015) が、アメリカの社会格差是正と子どもの将来の成功を予測しうるものとして非認知能力の重要性を説いて以来、特に幼児教育においてはその重要性が着目されている。これは従来、認知能力の高さが学歴や経済力、社会的地位などのポジティブアウトカムへの繋がりを期待していたのに対し、非認知能力がその後の認知的スキルの高さを予測したことから、早期からその育ちを支援する教育の必要性がクローズアップされた (OECD、2015) ことによる。

認知能力が知能検査や学力検査で測定される能力であるのに対し、労働市場での成功を予測する因子として登場した非認知能力は、態度、動機づけ、パーソナリティなど社会的成功を予測する能力として捉えられている (Bowles & Gintis, 1976; 西田ほか、2018)。非認知能力への注目が集まり始めたほぼ同時期に文部科学省 (2008) は、「知識・理解」、「汎用的技能」、「態度・志向性」、「総合的な学習経験と創造的思考力」からなる「学士力」を、また経済産業省 (2006) は、「前に踏み出す力 (アクション)」、「考え抜く力 (シンキング)」、チームで働く力 (チームワーク)」の3つの能力と12の能力要素 (主体性、働きかけ力、実行力 (「前に踏み出す力 (アクション)」、課題発見力、計画力、創造力 (「考え抜く力 (シンキング)」、発信力、傾聴力、柔軟性、情況把握力、規律性、ストレスコントロール力 (「チームで働く力 (チームワーク)」) からなる「社会人基礎力」をそれぞれ提唱し、学力とは異なった方法で測定され数値化されてきた (奥田、2014)。

このような能力が求められてきた背景として、大学全入時代を迎えて引き起こされたとされる学力低下の問題や、大学に入学できれば自動的にホワイトカラーの職につけると信じられてきたパイプライン・システムの崩壊 (山田、2004) が挙げられる。また、ニートやフリーターといった若者の就業が社会問題化していることの要因の一つとして、職場や地域社会で必要とされる能力不足が指摘されている (石道ほか、2016)。そのため、基礎知識や専門知識の向上と密接に関連している「社会人基礎力」は、産業社会を支える人材に求められる能力として、より重要性を増してきている。つまり、この能力は「コミュニケーション・スキル、論理的思考力、問題解決力、チームワーク、リーダーシップ、総合的な学

習経験と創造的思考力などに集中的に含まれる」(経済産業省、2010) とされ、社会人として生きていくために必要な総合的な力と言える。

以上のことから、「社会人基礎力」とは、「自発性、積極性といった能動的態度、意見や立場の異なる他者と協働して課題を探し達成していく力やその過程で経験する対人的相互作用を図る力」(引原ほか、2016)、あるいは「人と積極的に関わり合い物事を成し遂げる力」(細谷・田村、2012) と捉えることができる。

### 1.2 大学教育における社会人基礎力の育成

中央教育審議会答申 (2012) においてアクティブ・ラーニングという言葉が文部科学省の施策用語として初めて登場した。様々な教育・社会問題に対し、そこに存在する問題自体を自ら発見し、それを解決するための道筋を見定める能力の育成が学士課程教育に急務であるとし、従来の講義一辺倒授業から脱却し、アクティブ・ラーニング型授業への質的転換が求められた。

以来、学生自らの試行を促すのに能動的な学習方略を用いた Project Based Learning (PBL) 型実践教育など社会人基礎力向上に寄与した教育プログラムの効果が報告されている (藤井・平尾、2010; 中野ほか、2010; 平尾、2014)。また、非日常生活体験の場であるキャンプ活動によって社会人基礎力が向上した (築山ほか、2008; 青木ほか、2012) との報告もあり、体験活動を含んだ演習型授業によって、その効果が少しずつ明らかになってきている。

ところで体育実技授業は、スポーツを楽しむための技術の修得だけでなく、チームプレーを通じて主体性や協調性を育むことができる実践型教育である (石道ほか、2016)。また、コミュニケーション能力などの社会的スキルの向上をはじめとした多様な教育効果が期待できることも報告されている (木内ほか、2009; 西田・橋本、2009; 橋本、2012)。

体育実技授業と社会人基礎力との関連について、引原ほか (2016) は、ネット型スポーツがトレーニング形式の授業と比較して、また石道ほか (2015) は、球技系種目受講選択者は非受講者と比較して、そして石道ほか (2016) は、球技系種目受講者でも社会人基礎力向上を目的とした介入授業群が非介入群と比較して、それぞれ社会人基礎力の能力要素に有意な向上が認められたことを報告している。さらに細谷・田村 (2012) は、ダンスの授業において実

技だけでなく、テーマ設定、選曲と作品構成、演出・発表を加えた演習形式の授業によって社会人基礎力の自己評価得点が向上したことを示している。しかし、これらにおいて、それぞれの能力要素と授業との関連について明確に述べられているものは少ない。

そこで本研究では、体育の授業が運動技能だけでなく、その基盤となる知識の修得を基に、仲間と工夫して新たな動きを創り上げたり、あるいはスポーツを楽しむための工夫をしたりするなどによって「社会人基礎力」の能力及び能力要素の向上にどのような効果をもたらすのかを明らかにすることを目的とした。なお、「演習形式」の授業は、通常「講義形式」に対比するものとして位置づけられ、比較的少人数で参加者全員が事前、あるいは自ら設定したテーマについてまとめたものを討論することが一般的である。本研究ではグループで少人数化を図り、そこでの意見交換を通し課題解決や新たな創造を図っていくことを「演習形式」として用いることとした。

## 2 研究対象、研究内容

### 2.1 研究対象

本研究で対象としたのは、本学で実施している体育授業である（表1）。保育内容（表現A）及び体育科研究は筆者が15回担当したが、体育実技Aは後半の8回のみ担当した。

表1 対象授業と受講者・対象者数等

授業科目名	対象学年	開講時期	受講者数	対象者数	履修形態
体育実技A	1年	後期	52	47	選択
保育内容(表現A)	2年	後期	39	38	必修
体育科研究	3年	前期	26	25	選択

### 2.2 研究内容

バドミントンを扱う体育実技A（以後、「授業Ⅰ」と表記）は、管理栄養学科学生を対象にした選択科目で教員免許状必修科目、保育内容（表現A）（以後、「授業Ⅱ」と表記）は、身体を使った表現を主とする授業でこどもの生活学科では必修科目、体育科研究（以後、「授業Ⅲ」と表記）は小学校教員免許状必修科目となっている。なお、本研究は2020年度に実施した。

授業Ⅰは生涯スポーツに向けバドミントンを主とするものであるが、教師から与えられた内容を行うだけでなく、自分たちがより楽しめるようルールや練習方法、攻守の動き方を工夫することに重点を置いた。また、授業Ⅱ及び授業Ⅲは実技だけでなく、小学校学習指導要領や幼稚園教育要領等の基礎的知

識を修得し、それを幼児や小学生に指導するための指導案作成や模擬授業（保育）を行った。このように、いずれの授業においても教師から与えられた運動や課題を行うだけでなく、その運動をより深く楽しむために、あるいは子どもたちに指導するためにどのようにすればよいのかの観点で、まず自ら考えた後グループで話し合い、その上で新たな動きや楽しみ方を創り上げるといふ、「個人の発想」と「グループでの対話」を重視した演習形式の授業とした。授業計画は表2のとおりである。

社会人基礎力の把握は、授業の第1回目（授業Ⅰは第8回目）と第15回目の授業時に社会人基礎力レベル表（経済産業省、2008）の12項目に例示されている文言をそのまま援用し、5件法で評価させた。

### 2.3 分析方法

授業開始時における授業ごとの能力要素の比較には、一元配置分散分析を行った。授業実施前後における3つの能力比較には、反復測定二元配置分散分析〔授業形態3（授業Ⅰ、授業Ⅱ、授業Ⅲ）×測定時期2（pre、post）〕を行い、両者の間に有意な交互作用が認められた場合は単純主効果の検定を、また交互作用が認められなかった場合は主効果の検定を行い、有意であった場合はTukey法による多重比較検定を行った。また授業実施前後の自己評価得点の差についてはWilcoxonの符号順位検定によって授業形態ごとに検討した。

なお統計処理はPASWstatistics25を用い、統計的有意水準は5%未満とした。

## 3 結果

本研究を開始するに当たり、授業開始時の社会人基礎力を一元配置分散分析で比較したところ、いずれの能力要素とも有意差は認められなかった（表3）。授業開始時において社会人基礎力の学年差は見られなかったことになる。

社会人基礎力の3つの能力について測定時期と授業形態による二元配置分散分析を行ったところ、有意な交互作用は認められなかった（前に踏み出す力： $F=0.301, ns$ 、考え抜く力： $F=0.061, ns$ 、チームで働く力： $F=0.007, ns$ ）（表4）。また授業形態による主効果は認められず、測定時期による主効果は3つの能力とも認められた（前に踏み出す力： $F=26.63, p<.001$ 、考え抜く力： $F=18.40, p<.001$ 、チ

表2 分析対象授業の概要

回数	授業科目名		
	授業Ⅰ	授業Ⅱ	授業Ⅲ
		○オリエンテーション(授業目標、授業進行ガイダンス)	
1		○「幼稚園教育要領」等の理解とこれからの保育・教育〔講義〕 ○領域「表現」の理解〔講義〕	○「体づくり運動(遊び)」の内容の理解〔講義〕 ○「多様な動きをつくる運動(遊び)〔実技〕の「バランスをとる動き」を実施後、グループで工夫し、新たな運動(遊び)創りを行う《グループ→創作→発表》。
2			
3		○体全体を使つての表現「足ジャンケン」 ・《個人で考え、グループで話し合つて工夫し、新たに創り上げたものを発表する:個人→グループ→発表》 ○「オノマトペで遊ぼう」 ・オノマトペによる身体表現《個人→グループ→発表》	・「体を移動する動き」、「用具を操作する動き」、「力試しの動き」、「組み合わせる運動」を実施後、子どもたちが楽しめる運動を工夫し創る《グループ→創作→発表》。
4		○「オノマトペ」の台本作り ・架空の出来事の台本を作り、そこにオノマトペを使い表現する《個人→グループ→発表》	○「体の動きを高める運動」〔実技〕 ・「体の柔らかさを高める運動」、「巧みな動きを高めるための運動」、「力強い動きを高める運動」、「動きを継続する能力を高める運動」を実施後、グループで新しい動きを考え、全員で共有化する《グループ→創作→発表》。
5		○「身体全体を使つて表現」 ・むすんでひらいて、幸せなら手を叩こうを、身体全体で表現する。《個人→グループ→発表》	
6		○「動きの真似っこ」 ・保育者役が考えた動きを、子ども役も一緒に行う。 ○「動物園に行こう」 ・動物の動きづくり《個人→グループ→発表》で動作化された動物の動きを、全員で行う。	○「器械運動(系)」の内容〔講義〕 ○「鉄棒運動(系)」〔実技〕 ・支持感覚や逆さ感覚、振り感覚を養う運動遊びの実施。グループで基礎感覚を養う運動遊びを考え、発表する《グループ→発表》。 ・基礎感覚を養う運動遊びや基本的な技の指導法を考える。
7		○「童話の動作化」 ・童話を選定し、そこにオノマトペを加え脚本を創り、動作化した創作童話を発表する。	
8	○オリエンテーション ○バドミントン(ダブルス)のルール ○基本技能練習 ・サーブと相手コートへの返球 ○得点とサーブの順及び位置関係を理解するための試しのゲーム(4人1組)	○「水の三態の変化」の動作化 ・水の三態の変化を表す脚本を作成し、オノマトペを加え表現する。《個人→グループ→発表》	○模擬授業1(体づくり運動(系)) ・「体づくり運動(系)」の指導内容を考え、指導案を作成し模擬授業を行う。
9	○前時の技能復習 ○基本技能練習 ・ロングサービス ○リーグ戦 ・ルールづくり ・<4人1チームでダブルスゲームを2回。1ゲーム6分。> ○チームごとの振り返り、練習	○「バンダ親子たいそう」「カエルのたいそう」「パブリカ」 ・子どもに人気のある上記の体操を行い、音楽と身体表現の関係を体得する。	○模擬授業2(体づくり運動(系)) ・「体づくり運動」の指導内容を考え、指導案を作成し模擬授業を行う。
10	○チームごとに話し合い、既習技能の復習 ○基本技能の練習 ・オーバーヘッドストローク ○1打で打球者交替のラリーゲーム ○ペアの動きの確認 ○リーグ戦とチームごとの振り返り、練習	○「子どもたちが一緒に体を動かしたくなる踊り」の創作 ・《個人》曲を選び、自分なりの動きを考える。 《グループ》グループで選曲し、音楽に合わせて幼児が体を動かしたくなる動きを創り上げる。	○模擬授業3(鉄棒運動(系)) ・「鉄棒運動(系)」の指導内容(基礎感覚を養う動き)を考え、指導案を作成し模擬授業を行う。
11	○チームごとに工夫し、既習技能の練習 ○基本技能の練習 ・サイドアームストロング、アンダーハンドストローク ○1打で打球者交替のラリーゲーム ○リーグ戦とチームごとの振り返り、うまくいかなかった点の練習		○模擬授業4(鉄棒運動(系)) ・「鉄棒運動」の指導内容(支持系の基本的な技)を考え、指導案を作成し模擬授業を行う。
12	○チームごとに工夫し、既習技能の練習 ○ルールの検討 ○1打で打球者交替のラリーゲーム ○リーグ戦とチームごとの振り返り、練習	○「子どもたちが一緒に体を動かしたくなる踊り」の発表 ・《発表》グループごとに創作した踊りを発表する。 ○録画したビデオを視聴しての振り返り。	○「ボール運動(系)」の内容〔講義〕 ○「ボール運動(系)」ゴール型〔実技〕 ・アウトナンバーやドリブル制限によるバスケットボールを実施し、ボールを持たない動きについて理解する。
13	○チームごとに工夫し、既習技能の修得 ○ルールとペアの動きの確認 ○応用技能の練習 ・ドロップ ○リーグ戦とチームごとの振り返り、練習	○模擬保育(表現)1 ・幼児に体を使った表現を指導する内容を考え、指導案を作成し模擬保育を行う。	○模擬授業5(ボール運動(系)) ・アウトナンバーでドリブル制限を取り入れたバスケットボールの指導案を作成し、模擬授業を行う。
14	○チームごとに工夫し、既習技能の修得 ○応用技能の練習 ・ドロップ ○リーグ戦とチームごとの振り返り、練習	○模擬保育(表現)2 ・幼児に体を使った表現を指導する内容を考え、指導案を作成し模擬保育を行う。	○模擬授業6(ボール運動(系)) ・アウトナンバーでドリブル制限のないバスケットボールの指導案を作成し、模擬授業を行う。
15	○チームごとに工夫し、既習技能の練習 ○リーグ戦とチームごとの振り返り ○バドミントンの授業のまとめ	○模擬保育(表現)3 ・幼児に体を使った表現を指導する内容を考え、指導案を作成し模擬保育を行う。 ○保育内容(表現A)の授業のまとめ	○模擬授業7(ボール運動(系)) ・オープンナンバーでのバスケットボールの指導案を作成し、模擬授業を行う。 ○体育科研究の授業のまとめ

ームで働く力 :  $F=41.44, p<.001$ 。

そこで、授業によって社会人基礎力の自己評価得点がどのように変化したかを Wilcoxon の符号順位検定を行ったところ、表5に示すとおり3つの授業

形態すべてにおいて有意な増加が認められたのは、働きかけ力、実行力、柔軟性であった。また授業ⅠとⅡで有意な増加が認められたのは、計画力、創造力、情況把握力、授業ⅡとⅢの間では傾聴力と規律

表4 授業形態×測定時期の2要因による社会人基礎力の3つの能力得点

社会人基礎力 (3つの能力)	測定 時期	授業Ⅰ(n=47)		授業Ⅱ(n=38)		授業Ⅲ(n=25)		F値	P値	多重比較	
		m	sd	m	sd	m	sd				
前に踏み出す力	pre	3.33	0.43	3.13	0.78	3.17	0.66	測定時期	26.63	0.00 ***	post>pre
	post	3.65	0.56	3.53	0.59	3.45	0.76	授業形態	1.34	0.27 ns	
								交互作用	0.30	0.74 ns	
考え抜く力	pre	3.29	0.43	3.22	0.63	3.20	0.60	測定時期	18.40	0.00 ***	post>pre
	post	3.54	0.43	3.44	0.61	3.41	0.83	授業形態	0.50	0.61 ns	
								交互作用	0.06	0.94 ns	
チームで働く力	pre	4.16	0.47	4.10	0.65	4.06	0.74	測定時期	41.44	0.00 ***	post>pre
	post	4.50	0.59	4.45	0.63	4.40	0.85	授業形態	0.25	0.78 ns	
								交互作用	0.01	0.99 ns	

\*\*\* p&lt;.001

表3 授業実施前の社会人基礎力の授業間差  
(一元配置分散分析結果)

	F値	p値	多重比較
主体性	1.10	0.34	ns
働きかけ力	0.31	0.74	ns
実行力	1.68	0.19	ns
課題発見力	1.18	0.31	ns
計画力	0.19	0.83	ns
創造力	0.45	0.64	ns
発信力	0.01	0.99	ns
傾聴力	1.37	0.26	ns
柔軟性	0.23	0.80	ns
状況把握力	0.50	0.61	ns
規律性	1.32	0.27	ns
ストレスコントロール力	0.23	0.79	ns

性、そして授業Ⅰのみ有意差が認められたのは主体性であった。一方、課題発見力、発信力、ストレスコントロール力は、いずれの授業においても有意な増加は認められなかった。

#### 4 考察

これまでの体育の授業は、その種目の技術を修得する面に重きが置かれてきた。しかしこれからの体育では、スポーツ活動を通じて主体的に学び、立場の異なる他者と課題を見出し解決するなどの能力の育成が求められている。そしてその可能性を示唆した報告が見られる（森田ほか、2009、2011；森田、2014）。

本研究開始に当たり、社会人基礎力の差を検討したが、その差は認められなかった（表3）。これは、社会人基礎力は在学年数に影響していないとする本多ほか（2012）の報告と一致するものであるが、大学での学びを積み上げることで社会人基礎力が修得されていくことを期待する立場として残念な結果と言わざるを得ない。また溝上（2004）や上田・恒吉（2013）は、学生の学年が上がるにつれて学習意欲が低下する傾向にあることを指摘している。学習意欲が低下することで、基礎知識や専門知識の修得が

図られず、それが社会人基礎力の修得に繋がってこなかったとも考えられる。社会人基礎力は、それが単独で存在しているのではなく、専門知識や基礎知識の向上とも密接に関連しているものである（経済産業省、2010）ことから、両者の修得を一連のものとして捉えることが必要である。

社会人基礎力育成のためには、アクティブ・ラーニングなどの能動的な学習スタイルが求められ、渋谷・小泉（2003）は体験理論に基づく体系的プログラムによって他者との相互作用が機能することを述べている。また体育授業はチームプレー等を通じて主体性や協調性を育むことや、集団活動の中で自己表現の仕方、あるいは他者との関わり方など社会的活動を体験できる（石道ほか、2016）。本研究では、「深い楽しみと新たな動きの創造」を目指し、授業において動き（運動）を体験・共有し、楽しみ方や動き方を高めるためにグループで話し合い（協働による思考）、新たな動きの創造を核として取り組んだ結果、3つの能力（「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」）の向上に繋がったものと思われる。

次に授業開始前と終了時における変化量を授業別に比較したところ、授業Ⅰでは7つの能力要素、授業Ⅱでは8つ、授業Ⅲでは5つで授業前後に有意差が認められた（表5）。このうち、「働きかけ力」「実行力」「柔軟性」は、いずれの授業でも有意な向上が見られた。これは、3つの授業とも「深い楽しみと新たな創造」を求めるために他者と協働したことが「働きかけ力」の、また目標を自分たちで設定し取り組んだことが「実行力」の、そして対話を通して意見等の違いを理解し、創り上げていったことが「柔軟性」の向上に繋がったものと考えられる。これらの3つの能力要素に共通するのは「他者との協働」であり、本研究において社会人基礎力の大きな要素となる人と積極的に関わり合い物事を成し遂げる力

表5 各授業における授業実施による自己評価得点の変化とその平均点及び中央値

授業 I 能力要素	pre					post					z値	Wilcoxon検定
	M	SD	パーセンタイル			M	SD	パーセンタイル				
			25	中央値	75			25	中央値	75		
主体性	3.51	0.50	3.33	3.33	3.67	3.73	0.67	3.33	4.00	4.33	-2.41	**
働きかけ力	3.29	0.89	2.67	3.33	4.00	3.55	0.60	3.33	3.67	4.00	-3.45	***
実行力	3.45	0.57	3.00	3.33	4.00	3.74	0.59	3.33	3.67	4.33	-2.58	**
課題発見力	3.69	0.43	3.33	3.67	4.00	3.62	0.42	3.33	3.67	4.00	-0.72	ns
計画力	3.09	0.61	2.67	3.00	3.33	3.50	0.55	3.33	3.67	4.00	-3.40	*
創造力	3.09	0.53	2.67	3.00	3.33	3.51	0.54	3.00	3.67	4.00	-4.36	***
発信力	3.57	0.57	3.33	3.67	4.00	3.59	0.57	3.33	3.67	4.00	-0.28	ns
傾聴力	3.71	0.53	3.33	3.67	4.00	3.87	0.70	3.33	4.00	4.33	-1.31	ns
柔軟性	3.01	0.68	2.67	3.00	3.33	3.75	0.56	3.33	3.67	4.00	-5.17	***
状況把握力	3.13	0.48	3.00	3.00	3.33	3.70	0.53	3.33	3.67	4.00	-5.26	***
規律性	3.75	0.57	3.33	3.67	4.00	3.98	0.59	3.33	4.00	4.33	-1.88	ns
ストレスコントロール力	3.61	0.50	3.33	3.67	4.00	3.61	0.67	3.00	3.67	4.00	-0.19	ns

  

授業 II 能力要素	pre					post					z値	Wilcoxon検定
	M	SD	パーセンタイル			M	SD	パーセンタイル				
			25	中央値	75			25	中央値	75		
主体性	3.29	0.89	2.67	3.33	4.00	3.55	0.60	3.33	3.67	4.00	-1.73	ns
働きかけ力	2.92	0.88	2.33	3.00	3.42	3.47	0.69	3.00	3.67	4.00	-3.46	***
実行力	3.19	0.79	2.67	3.33	3.67	3.57	0.73	3.33	3.67	4.00	-2.05	*
課題発見力	3.72	0.55	3.33	3.67	4.00	3.56	0.63	3.25	3.67	4.00	-1.33	ns
計画力	2.99	0.91	2.33	3.00	3.67	3.43	0.68	3.00	3.67	4.00	-2.92	**
創造力	2.96	0.75	2.58	3.00	3.42	3.33	0.71	3.00	3.33	4.00	-2.85	**
発信力	3.60	0.74	3.00	3.67	4.00	3.54	0.74	3.00	3.50	4.08	-0.69	ns
傾聴力	3.33	0.71	3.00	3.33	4.00	3.66	0.71	3.25	3.67	4.00	-2.28	*
柔軟性	2.94	0.75	2.33	3.00	3.67	4.00	0.53	3.67	4.00	4.33	-5.09	***
状況把握力	3.07	0.84	2.67	3.33	3.67	3.85	0.61	3.67	4.00	4.33	-4.19	***
規律性	3.69	0.56	3.33	3.67	4.00	4.03	0.60	3.67	4.00	4.42	-2.28	*
ストレスコントロール力	3.53	0.64	3.00	3.50	4.00	3.52	0.69	3.00	3.50	4.00	-0.04	ns

  

授業 III 能力要素	pre					post					z値	Wilcoxon検定
	M	SD	パーセンタイル			M	SD	パーセンタイル				
			25	中央値	75			25	中央値	75		
主体性	3.32	0.85	2.67	3.33	4.00	3.49	0.71	3.17	3.67	4.00	-0.93	ns
働きかけ力	2.99	0.57	2.67	3.00	3.33	3.32	0.78	3.33	3.33	3.67	-2.22	*
実行力	3.21	0.75	2.67	3.33	3.67	3.53	0.94	3.33	3.67	4.00	-1.65	*
課題発見力	3.52	0.66	3.17	3.33	4.00	3.56	0.90	3.00	4.00	4.00	-0.57	ns
計画力	3.04	0.78	2.67	3.00	3.83	3.35	0.91	3.00	3.33	4.00	-1.60	ns
創造力	3.04	0.73	2.67	3.00	3.50	3.33	0.91	3.00	3.67	4.00	-1.72	ns
発信力	3.59	0.83	3.00	3.67	4.17	3.43	0.82	3.33	3.33	4.00	-1.07	ns
傾聴力	3.44	0.83	3.00	3.33	4.00	3.85	0.85	3.67	4.00	4.33	-2.47	*
柔軟性	2.89	0.71	2.67	2.67	3.00	3.84	0.78	3.67	4.00	4.33	-3.92	***
状況把握力	3.24	0.66	3.00	3.33	3.67	3.47	0.78	3.33	3.33	4.00	-1.64	ns
規律性	3.51	0.77	3.00	3.67	4.00	3.89	0.72	3.67	4.00	4.17	-2.59	**
ストレスコントロール力	3.61	0.78	3.00	4.00	4.17	3.53	0.91	3.17	3.67	4.00	-0.37	ns

\*p<.05, \*\*p<.01,\*\*\*p<.001

(細谷・田村、2012) が向上したと考えられる。「傾聴力」と「規律性」は授業 I で有意な向上を示さなかった。これは、授業 I の開始時においてこの能力要素の得点が高かったことが影響していると考えられる。また「主体性」で有意な向上を示したのは授業 I のみであった。これは、バドミントンに特化した授業であったことから、自分たちで既習技能の練習をしたり、ゲームを楽しむためにルールや作戦を考えたりしていったことが、他の2つの授業に比べ主体的な学習に繋がったと考えられる。

それに対し「課題発見力」、「発信力」、「ストレスコントロール力」は、いずれの授業においても有意

な変化が認められなかった。「ストレスコントロール力」は、「ストレス発生源に対応する能力」と定義され、前向きな行動や成長のチャンスといった自己を向上させるという捉え方である。本研究ではストレスコントロール力に繋がる場面がなかったために、そのことに対処し自己を向上させることができなかったことが考えられる。青木ほか (2012) は、大学生のキャンプ体験学習においてストレスコントロール力に効果が見られなかったことを報告している。キャンプという自然界で非日常的生活を体験する中においてもその能力の向上が見られなかったことから考えると、大学の一つの授業によってその能力に変

化を起こすまでには至らなかったのではないかと思われる。また「発信力」は、「自分の意見を分かりやすく伝える力」と定義されている。本研究では、グループでの話し合い活動の一つとして発信力の向上を狙ったが、意図した成果は得られなかった。これはグループ内で意見交換は行われていたが、話すポイントの整理や理路整然とした話を行おうとする社会人基礎力のねらいを達成できていなかったと考えられる。従って授業での話し合い場面では、「発信力」の内容の意識付けを行うことが重要なものと思われる。そして「課題発見力」は、「現状分析」、「課題抽出」、「課題の明確化」が着眼点となるものである。引原ほか（2016）同様、本研究においても有意な変化は認められなかった。指導に際し、グループで協議し新たな動きを創ることで重点化をかけたつもりであったが、協働して創るということに重点が置かれたために、課題を明確にしていくという意識付けが十分でなかったことが考えられる。「課題発見力」を高めるためには、今、何が問題なのかという現状分析や課題抽出、そして何をどのように解決していけばよいのかという視点を明確にした授業が求められる。

## 5 結論

本研究では、演習形式を導入した体育授業によって社会人基礎力の向上を図ることができるのかについて検討してきた。その結果、3つの能力は有意に向上した（前に踏み出す力； $F=26.63, p<.001$ 、考え抜く力； $F=18.40, p<.001$ 、チームで働く力； $F=41.44, p<.001$ ）ことから、演習形式の体育授業は社会人基礎力の向上に効果を発揮する可能性が示された。また12の能力要素を検討すると、「働きかけ力」「実行力」「柔軟性」はいずれの授業においても、また「計画力」「創造性」「状況把握力」「傾聴力」「規律性」は複数の授業において有意な向上を示した。このことは、「他者との対話・協働で深い楽しみと新たな動きの創造」をコンセプトに演習形式の授業に取り組んだ成果と考えられる。一方、「課題解決力」、「発信力」、「ストレスコントロール力」は有意な変化を示さなかった。特に「課題発見力」は、本研究で修得させたい社会人基礎力の一つであったがその成果は見えなかった。課題を明確にして追及していくことの意識化を図った授業展開が今後の検討課題である。

本研究の限界として、授業実施時期や対象学年、

授業時間が統一されていなかった。授業形態との関連を検討するには、これらの点の統一ができていないことが本研究の限界として挙げられる。

## 引用文献

- 青木康太郎、粥川道子、杉岡晶子（2012）キャンプ体験が大学生の社会人基礎力の育成に及ぼす効果に関する研究、北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要、3、27-39
- バックマン、J. J.（2015）幼児教育の経済学、古草秀子訳、東洋経済新報社
- Bowles,S.&Gintis,H.(1976)Schooling in capitalist America.75, New York:Basic Books
- 中央教育審議会答申（2012）新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて－生涯学び続け主体的に考える力を育成する大学へ－、
- 橋本公雄（2012）体育実技授業における心理社会的要因を媒介変数としたメンタルヘルス改善・向上効果モデル構築、大学体育学、9、57-67
- 引原有輝、森田啓、若林斉、金田晃一（2016）実技種目の異なる大学体育授業が社会人基礎力の育成に及ぼす影響、大学体育学、13、16-25
- 平尾元彦（2014）山口大学におけるキャリア学習の取り組み、大学教育、11、36-42
- 本多美美子・金高宏文・竹下俊一（2012）鹿屋体育大学生の社会人基礎力に関する研究－性、学年、専攻課程による比較－、学術研究紀要（鹿屋体育大学）、44、1-6
- 細谷洋子・田村典子（2012）創作ダンス授業における社会人基礎力の育成についての一考察－問題解決学習の課題に着目して－、四国大学紀要、(A)37、77-90
- 藤井文武、平尾元彦（2010）社会人基礎力を高める授業の実践－産学連携 PBL 授業「アクティブ・ラーニング」の取組－、大学教育、7、22-34
- 石道峰典、西脇雅人、中村友浩（2015）選択科目の体育実技授業を履修する大学生の社会人基礎力の特徴について、大学体育研究、37、1-10
- 石道峰典・西脇雅人・中村友浩（2016）体育実技授業における社会人基礎力育成を意図した介入効果の検証、大学体育学、13、26-34
- 経済産業省（2006）社会人基礎力に関する調査・報告書  
[https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou\\_wg/pdf/001\\_s01\\_00.pdf](https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou_wg/pdf/001_s01_00.pdf)  
 参照日 2021年7月25日
- 経済産業省（2008）今日から始める社会人基礎の育成と評価  
[Kokuyo-st/stationery/img/item01/2008kyoukara.pdf](http://www.kokuyo-st/stationery/img/item01/2008kyoukara.pdf)  
 参照日 2020年3月10日
- 経済産業省（2010）社会人基礎力育成の手引き－日本の将来を託す若者を育てるために－、学校法人河合塾、62
- 木内敦詞、新井弘和、浦井良太郎、中村友浩（2009）行動科学に基づく体育プログラムが大学新生の身体活動関連変数に及ぼす効果；Project FYPE、体育学研究、54、145-159
- 溝上慎一（2004）大学新生の学業生活への参入過程：学習意欲と授業意欲、京都大学高等教育研究、10、67-87
- 文部科学省（2008）学士課程教育の構築に向けて（答申）平

成 20 年 12 月 24 日

- 森田啓・林容一・引原有輝・谷合哲行 (2009) 教養体育としての大学体育;サッカーを事例、大学教育学会誌、36(1)、62-66
- 森田啓・引原有輝・谷合哲行・東山幸司・三村尚央・亀山巖・黒澤健太郎・林久仁則・松元剛 (2011) 種目特性と授業形態を探究課題とした教養教育としての大学体育：フラグフットボールと他大学との交流試合を事例に、大学体育学、8、75-88
- 森田啓 (2014) 大学体育が目指すべきこと：高校体育，スポーツクラブ体育，専門体育との関連から、大学体育研究、36、39-50
- 中野和司、前佛栄、竹内利明、三木哲也 (2010) 工科大学における PBL 型専門的キャリア教育、電子情報通信教育学会技術研究報告、SITE、技術と社会・倫理、110(64)、19-24
- 西田季里、久保田 (河本) 愛子、利根川明子、遠藤利彦 (2018) 非認知能力に関する研究の動向と課題ー幼児の非認知能力の育ちを支えるプログラム開発研究のための整理ー、東京大学大学院教育学研究科紀要、58、31-39
- 西田順一、橋本公雄 (2009) 初年次学生の社会的スキル改善・向上を意図した体育実技の心理社会的有効性、大学体育学、6、91-99
- OECD(2015)Skills for Social Progress : The power of Social and Emotional Skills : OECD Skills Studies,OECD Publishing
- 奥田雄一郎 (2014) 大学生の時間的展望と社会人基礎力ー時間的展望のタイプによる検討ー、共愛学園前橋国際大学論集、14、33-46
- 洪倉崇行・小泉昌幸 (2003) スポーツ活動を素材とした人間関係トレーニングの実施とその効果、新潟工科大学研究紀要、8、117-124
- 築山泰典、神野賢治、田中忠道 (2008) 大学キャンプ実習が「社会人基礎力」に及ぼす有効性の検討、福岡大学スポーツ科学研究、39(1)、13-26
- 上田佳苗・恒吉徹三 (2013) 大学生の学習意欲の変化について、山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要、36、115-123
- Yamamoto,Yoko(2015)Social class and Japanese mother's support of young children's education:A qualitative study. Journal of Early Childhood search,13(2),165-180
- 山田昌宏 (2004) 希望格差社会ー「負け組」の絶望感が日本を引き裂くー、筑摩書房

(原稿受理年月日：2022 年 1 月 11 日)